

# ベトナム交趾郡治・レイロウ城址第4次発掘調査と海防市大型漢墓の新発見

黄晓芬・阮文団・会下和宏・張得戦・木下保明・懷英・丁麗玄・大川純一・周孟権

## はじめに

日越共同調査による紅河デルタの古代都市の発掘調査と学際的研究は、ベトナムの国史跡・レイロウ遺跡を中心に実施している。2012-13年遺跡の予備調査を経て、2014年にレイロウ城址第1次発掘調査を開始して以来、4年連続で実施・展開している。その結果、長い間実態不明であったレイロウ遺跡の真相を解き明かしつつ、古城址の盛衰変遷を把握しそのIV期編年を初めて提示した。レイロウ城址は、漢の武帝より設置された交趾郡治（政庁）で、六朝・隋唐初期に至り交州治所として発展、繁栄しつづけた。また、遺構・遺物の検証によってレイロウは、紅河デルタにおける古代政治・文化の中心だけでなく、農業、手工業生産や経済建設、水運が発達し、南海貿易の拠点都市の一つであり、古代東アジア・南アジアにおける文化交流の結節点であった[黄編著2017]。

今年度の企画調査は、交趾郡治・レイロウ創設期（I期）の城郭構造を明らかにするのが目的である。レイロウ遺跡第4次発掘調査の実施期間は2018年1月9日～29日、発掘面積は21㎡である。その間、海防（ハイフォン）市博物館の協力を得て、当地の山を崩す工事で破壊された大型漢墓の応急調査を実施し、磚室の測量、写真記録を行った。

## 1. レイロウ城内の発掘区

レイロウII-III期内城の北東隅（14-15LL.T2）の東側（図1）に、今年度の発掘調査区を2×10mと設定し、17LL.T9と編番した。

### 1) 発掘区上層 17LL.T9.L1-L3（図1）

18世紀前後の溝を検出し、二次堆積層 T9.L2からは器の鋳型片や坩堝、砥石などの鋳造遺物が多数に検出した。唐代の整地層には「州」（交州を指す）を銘刻した唐代の磚の破片が見つかり、これは交趾郡治・交州治の所在を示す有力な証拠である。また、六朝期の整地層 T9.L3（図1）では、磚瓦建材・土を混ぜて積み重ねた瓦礫層で、内城東側の地盤を強化する役割を果たしている。包含層から六朝期の磚瓦、人面文・蓮華文瓦当や陶磁器が多量に検出し、ドンソン文化の土器型式、施文特色をもつ「ドンソン・

漢」という土器片もあった。

### 2) レイロウ内城土塁東濠 17LL.T9.H1

現地表下2.2m、六朝期内城土塁東壁14LL.T2に連接する内城東濠 T9.H1を検出した（図1）。内城土塁東壁の降下層（14LL.T2）からは東濠 H1の東端につながる内城の東濠幅は約10m・深さ約0.90m。濠内埋土の遺物は装飾文様や文字を施した磚、瓦が多量に検出した。ゆえに、内城東濠はII期（3世紀頃）から建設、利用し、III期（6世紀頃）に廃絶されたと推測できる。

### 3) レイロウ築城I期の東濠 17LL.T9.H2

六朝期内城東濠 H1の下層には、交趾郡治の創設期、レイロウ築城I期にあたる東城濠 T9.H2を検出した（図1）。地表下3.8m、東城濠の底部に至り、I期東濠の幅は12.2m、深さ約1.4m。この濠内埋土から磚瓦建材、陶磁器片が多量に出土し、そのうち漢の磚瓦造形・装飾文様が主流で、「ドンソン・漢」の土器片や後漢末・三国呉（3c初期）の瓦片が少々あり、鉄器2点、また木器残片や炭、動植物遺存体も多数検出した。

### 4) レイロウ築城I期東濠の付設濠 17LL.T9.H3

創設期の交趾郡治・レイロウI期の東城濠 T9.H2の外側に、それと直角に接続する溝 T9.H3（図3）を検出した。この溝は深さ40cm、幅は1.5m以上（T9の南限まで1.5m）。出土遺物は漢の磚瓦、陶磁器片が少量である。この溝 H3の用途について、今後の追跡調査に期待するが、可能性として、レイロウI期東城濠の水量調節や物資運搬などを兼ね備えた人工的な水路が考えられる。

以上の結果、本プロジェクトが提示した交趾郡治・レイロウ築城のIV期編年を裏付けることになった。

## 2. ハイフォン大型漢墓の応急調査

ベトナム北部の港湾都市・ハイフォン（海防）市北西22km、標高30mの小高い山を崩す工事で、山頂に1基の大型磚室が発見された。磚室の半分以上は壊されたが、残存状態を観察すると、アーチ頂をもつ玄門・前室の一部（図2）、アーチ頂の残存後室やその隅角、壁、および床敷磚の一部などを確認できる。現地の測量観察・写真記録を行った結果、この磚室構造は回廊型前堂後（双）室式の室墓に属し[黄2000]、磚室1辺の長さ

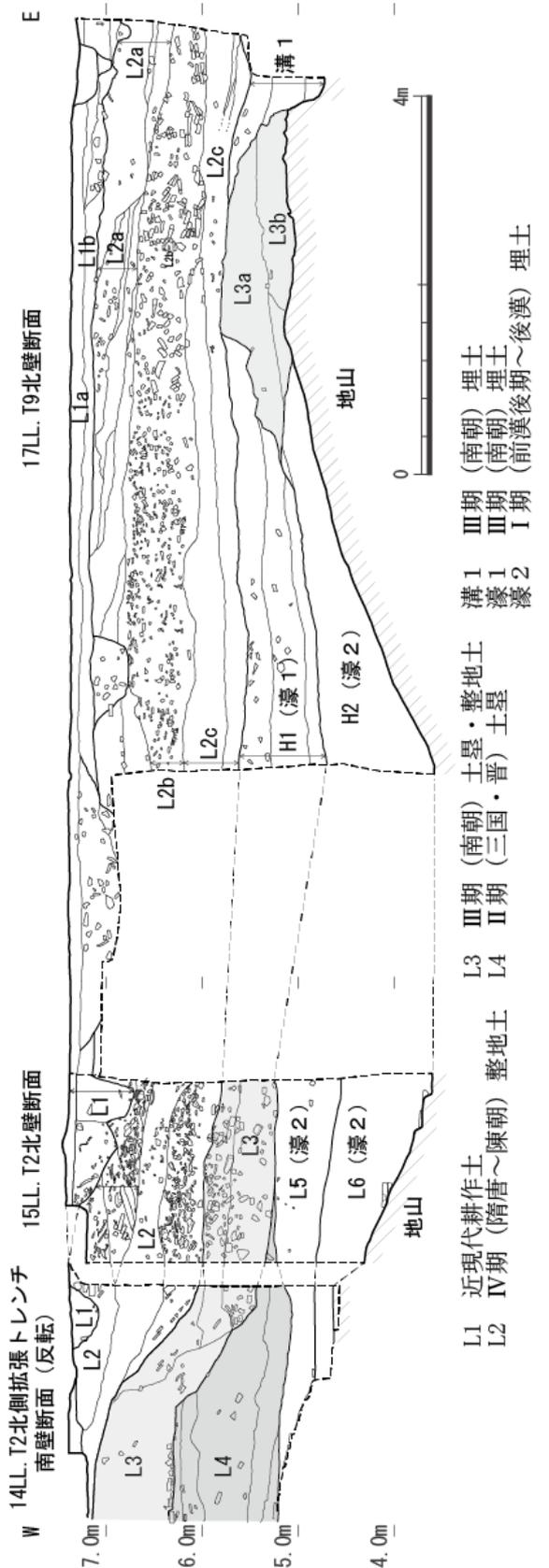


図1 ルイロウ城址第4次発掘調査断面図 (1/80)

10mを測る典型的な大型漢墓であることを確認した。墓磚は大規格で、長方形磚(長 49×幅 27×厚さ 7~8 cm)、楔形磚(長 48×幅 26.5×厚さ 7-5 cm)で、灰釉磚もある。それぞれ格子文、菱形文、S字形、円形文を施したり、文字を刻んだりしたのが特徴的である。こうした大型磚室の構造プラン、多種の文様磚・文字磚の特徴からみると、後漢期の諸侯王墓クラスに推定できる。これまで、ベトナム漢墓調査においていまだ類例を見ない最大規模をもつものである。造営時期については、大型磚の造形文様、漢字の書体などの特徴から考察するとおおよそ後漢前半、1世紀頃と推定できる。

ハイフォン大型漢墓の発見は、ベトナム北部古代都市の探求には新たな手がかりを提供してくれた。

引用文献

黄晓芬 2000 『中国古代葬制の伝統と変革』 勉誠出版  
 黄晓芬編著 2017 『交趾郡治・ルイロウ遺跡II—2014-15年度 発掘からみた紅河デルタの古代都市像—』 フジデンス出版、



図2. ハイフォン大型漢墓 回廊型室・前堂構造



図3. ハイフォン大型漢墓 回廊型室・後室構造